

創作子どもSF全集 7

少年エスパー戦隊^{せんたい}

豊田有恒・著／藤沢友一・絵



とよ だ ありつね
豊田有恒

少年エスパー戦隊

国土社 1974

110 P 21cm×19cm (創作子どもSF全集 7)

基本カード記載例

© 創作子どもSF全集 7

少年エスパー戦隊

初版発行 一九六九年五月五日

三版発行 一九七四年五月二十日

《検印廃止》

著 者 とよ だ ありつね
豊田有恒

発行者 長宗泰造

印刷所 株式会社 厚徳社

発行所 株式会社 国土社

東京都文京区目白台一―一七―六

電話 (九四三) 三七二二(代)

振替 東京九〇六三二

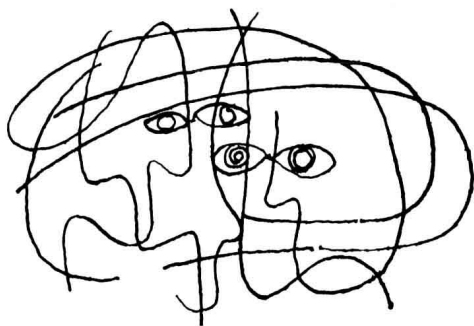
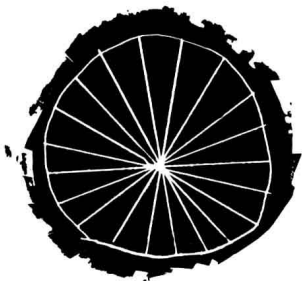
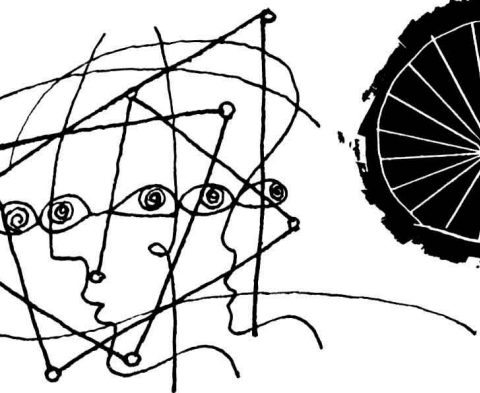
乱丁・落丁の本はおとりかえます

少年エスパー戦隊

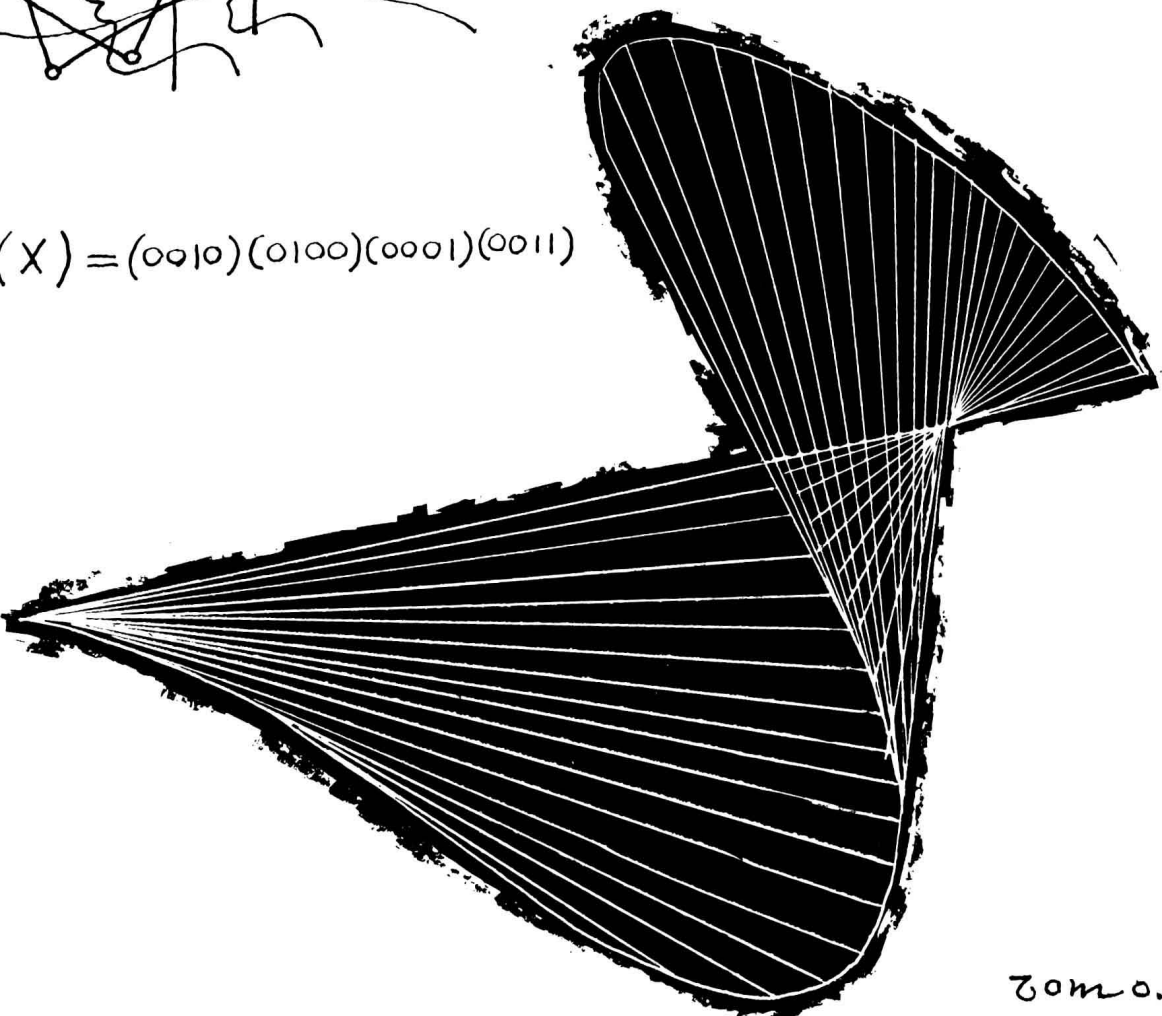
豊田有恒・著 藤沢友一・絵



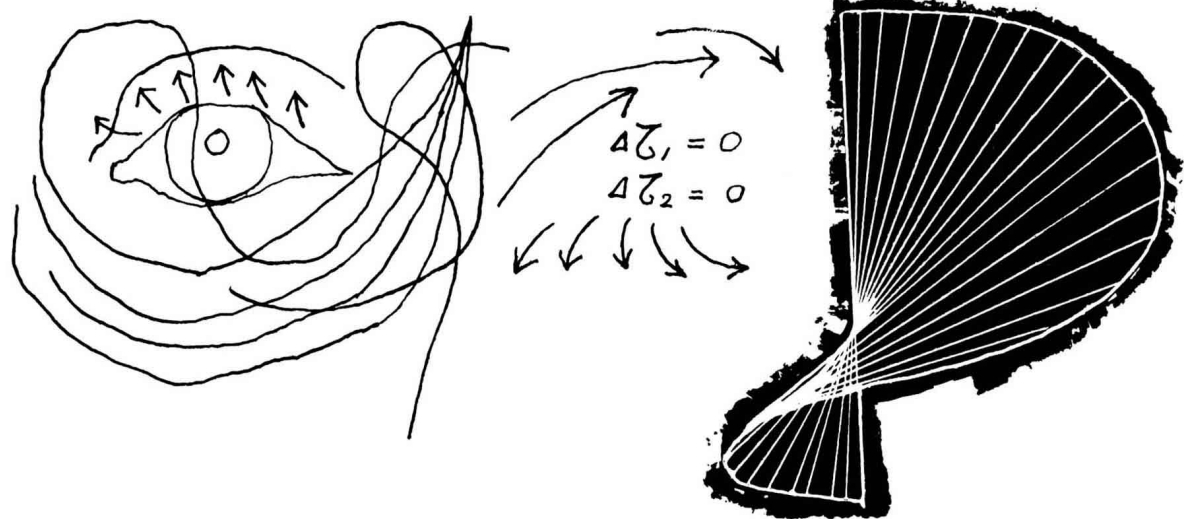
tomochi



$$(X) = (0010)(0100)(0001)(0011)$$



zom o.



* もくじ

ふしぎなよび声 6

なぞの男チャン 18

白髪はくはつの老人ろうじん 26

超心理学者ちようしんり南山教授がくしやみなみやまきやうじゆ 38

良太りやうたの事務所じむしょ 46

人類じんるいのために 54

なまりのへや 64

ぼくもなかまにいてくれ 72

サイコキネシス 80

シェパードのゆくえ 90

がんばれ少年エスパ―戦隊せんたい 96

あとがき



著者紹介

文 豊田有恒

一九三八年五月生まれ。慶応大学医学部を中退、武蔵大学経済学部卒業。虫プロダクションのアイデアコンサルタントをへて、作家生活に入る。SF作家。

おもな著書に、『火星で最後の……』

『モンゴルの残光』『アステカに吹く嵐』

(以上早川書房刊)『時間砲計画』(盛光社刊)などがある。

現住所〓東京都世田谷区北沢四―五―九

絵 藤沢友一

一九三二年、北海道に生まれる。一九四四年、東京美術学校卒業。一九四六年から一九六三年まで自由美術家協会会員。一九六三年からアートクラブ会員、現在にいたる。前衛的絵画活動を展開し、個展、グループ展に活躍する。

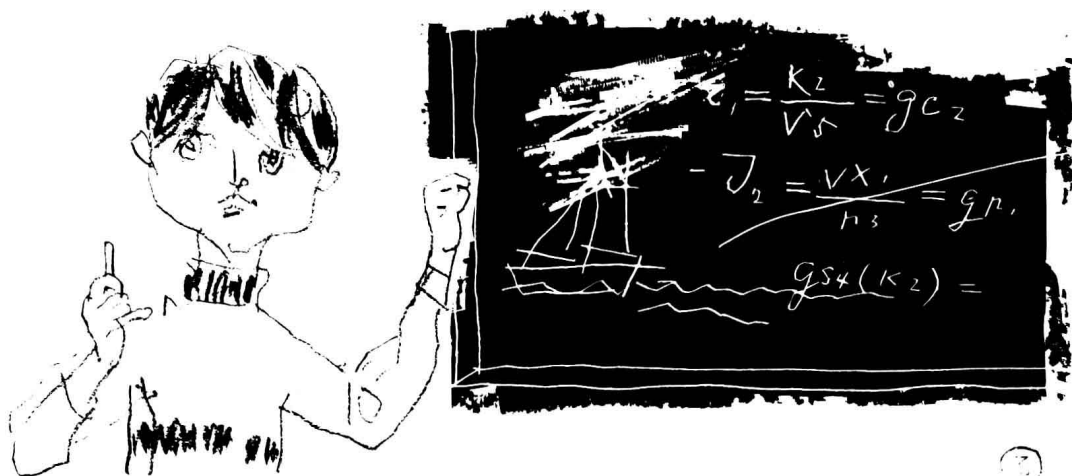
最近、児童図書のイラストに活躍しはじめ、『子どもの町』『二人ともパンのにおい』などの作品がある。

現住所〓東京都品川区旗の台五―十二―六

光風荘

少年エスパー戦隊は、「よみうり少年少女新聞」に連載したものを、書きなおしたものです。この物語では、ふしぎな超能力を持った少年少女が、大活躍します。もし、ほんとうに、そんな超能力をもっていたら、人間はそれを正しく使うことができるでしょうか？

この物語のテーマは、まったく知らない少年少女たちが、エスパーなかまだということを知って、おたがいに力をあわせて、日本を守ろうとすることです。



ふしぎなよび声



「ヤッコダコ、まけるな！」

「あがれ、あがれ、天まであがれ！」

広場のなかから、げんきのいいかけ声がきこえる。お正月の空に五つのタコがうかんでいる。次郎は、むちゆうで、タコの糸をひいた。うまく風にのったところで、こんどは、糸をのばしてやる。次郎のタコは、ぐんぐんのぼっていき、いちばん上になった。

ここは、東京、世田谷区の住宅街のあき地である。家がたてこんだ東京には、あまりあき地はない。ここは、すぐ近くの水道道路の道はばが、ひろげられることになっているので、工事がはじまるまでは、子どもたちの遊び場になっているのである。

もうすぐ工事がはじまる。そうなれば次郎たちの遊び場が、またひとつなくなってしまう。

女の子たちは、みんな着物きものをきて、おめかししている。ときどき、キャーッという声がきこえるのは、むこうでハネつきをしている女の子のなかで、負けまた子がスミをぬられているのだ。

次郎じろうは、ふと、道路どうろのほうをみて、はっとなった。

二つくらいの女の子が、ヨチヨチと道路どうろにでていく。きつと、いっしょにきたおねえさんが、ハネつきにむちゆうなので、つまらなくなつたのだろう。

「あつ、あぶない！」

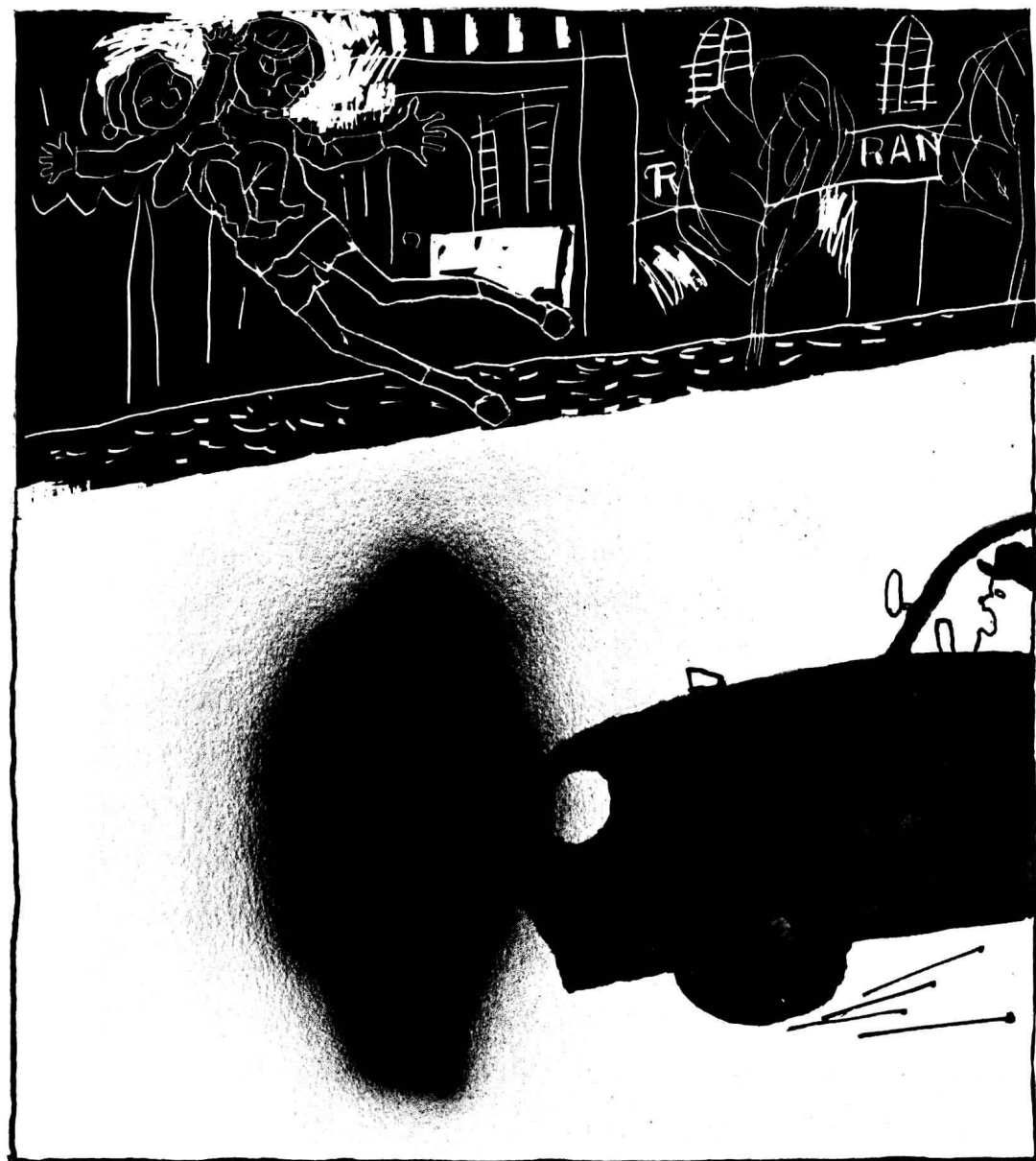
次郎じろうは、タコ糸をはなして、道路どうろへとびだした。そのとき、むこうからやってきたタクシーが、そのまま、女の子と次郎じろうめがけて、つつこんできた。

キキーッ！

耳のいたくなるような、ブレーキの音をたてて、タクシーが急停車きゆうていしやした。

「だいじょうぶか？」

タクシーの運転手うんでんしゅが、あわててとびおりてきた。車のまえにまわった運転手うんでんしゅは、さつと顔色かおいろをかえた。そこには、次郎じろうのすがたも、女の子のすがたも、みあたらなかった。ブレーキの音がきこえたので、タコあげやハネつきをしていた子どもたちが、道路どうろにとびだしてくる。



「たいへんだ！」

運転手は、道路わきのドブのなかをみつめた。きっと、はねとばしたとたんに、ふたりが、ドブへ落ちたとでも、思ったのだろう。だが、ドブのなかにも、ふたりのすがたは、みあたらない。運転手は、なきそうな顔になった。

「へんだぞ、次郎くんがいないぞ。さっきまでタコあげをしていたのに……」

そのとき、うしろのほうで、女の子のなき声がきこえた。はっとして、みんながふりかえる。あき地のすみの道路と反対側に、ふたりの子どもがたおれていた。タクシーにはねられたはずのふたりだ。

次郎の手のなかで、女の子が、はげしくなきさげんでいた。次郎は、女の子をだいたまま、立ちあがった。

「ユカリ！」

「おねえちゃん」

女の子は、おねえちゃんの手にだきとられて、やっとなきやんだ。

「き、きみ、ほんとうに、だいじょうぶかい？」

タクシーの運転手が、こわごとと次郎をみつめて心配そうにきいた。

「ぼく、いったい、どうしたんだろう？　タクシーにひかれそうになって、あ

つと思つたら、いつのまにかここにいたんだ」

次郎は、キヨロキヨロあたりをみまわした。

タクシーのとまっているところから、ここまで、二十メートルもはなれてい
る。こんなにおくまで、はねとばされたのなら、いくら運がよくても、重傷
をおっているはずである。

だが、次郎は、タクシーにぶつかったおぼえがない。『あつ、あぶない』と
思ったしゆんかんに、いつのまにか、ここにきていたのである。

次郎は、まえにも、こんなことがあったのを、思いだした。

あれは、去年の夏、海水浴にいったときだった。次郎は、ついうっかり、深
いほうへとびだして、大波にまきこまれてしまった。

『あつ、おぼれる』と思つたところまで、はつきりおぼえていた。そして、次
郎は、水をのんで氣絶したまま、いつのまにか、海岸にたおれていたのである。
そのときは、きつと、だれかにたすけられて、海岸にひきあげてもらったの
だろう、ということになった。

だが、こんどは、ちがう。次郎は、だれにもたすけられないで、あつという
まに、せまってくるタクシーのまえから消え、二十メートルもはなれたところ

に、あらわれたのだ。

家へ帰^{かえ}っても、次郎^{じろう}は、きょうのできごとが気になって、おちつかなかった。さいきん、次郎^{じろう}のまわりには、いろいろ、ふしぎなことばかりおこる。次郎^{じろう}は、ときどき、だれかに、よばれているような気がするのだ。

それも、友だちと遊^{あそ}んだりしているときなら、べつにふしぎでもなんでもないが、夜ひとりでいるときに、だれかによばれているように感じるのである。

あのふしぎなよび声と、きょうのできごとは、なにか関係^{かんけい}あるのだろうか？
「次郎^{じろう}くん、あなたは、どこにいるの？」

とつぜん、あのふしぎな声がきこえた。いや、きこえたというより、次郎^{じろう}のあたまのなかに、そのままひびいてくるような感じ^{かんじ}だった。

次郎^{じろう}は、あたりをみまわした。だが、ここは、次郎^{じろう}の勉強^{べんきょう}べやである。勉強^{べんきょう}づくえと、野球^{やきゅう}のバットとグローブがある。いつもとおなじである。もし、だれかいたとしても、かかれるところなんかない。

「次郎^{じろう}くん、あなたにあいたいわ」

また、声^{こゑ}がはなしかけてきた。これまで、きいたこともない女の子の声である。
「いったい、きみは、だれなんだ？」

次郎は、おもわず声をあげた。

まわりにだれもないのに、返事をするのは、なんとなく、へんだった。

“……もしかしたら、ぼくは、気がくるってるんじゃないか……”

「ちがう、あなたは、気がいいじゃないわ。あたし、あなたにあいたい。あした、十時にオリンピック公園へきてね」

ふしぎな声は、それだけいうと、もう、いくらきいても、こたえなかった。

ここは、原宿にあるオリンピック公園。カタツムリのような近代的な建物は、オリンピック・スタジアムである。

次郎は、おおぜいの人たちにまじって、公園のなかへはいつていった。スタジアムの階段をのぼっていくと、やがて、競技場のなかへはいる。

次郎は、スタンドの人ごみのなかで、立ちどまった。かれの目のまえには、赤いセーターをきた少女が立っていた。

「あなたが、次郎さんね？」

その少女は、次郎にむかって、わらいかけた。

少女のほうは、まるで、ずっとまえから友だちだったみたいに、とても、な

れなれしくはなしかけてくる。だが、次郎はその少女を知らない。これまで、いちどもあったことがないのだ。

「次郎さん、きのう、タクシーにはねられそうになったわね？」

少女が、きいた。

なぜ、この子が、そんなことを知っているのだろうか？　きのうのことは、ほかの子にはなしたこともないのに……。

「きみは、だれだ？　なぜ、ぼくのことを知っているんだ？」

次郎はしだいにイライラして、大声できいた。

「それが、あたしにもわからないの。なぜだかわからないけど、三か月くらいまえから、次郎さんの考えていることが、わかるようになったのよ」

少女は、かなしそうに、くびをふった。

次郎は、ちよっと、かわいそうになった。なにか、はなしかけようと思ったが、まだ、この少女のなまえをきいていないことを、思いだした。

「あたしの名は、亜矢子、あたしの名は、亜矢子……」

とつぜん、あのふしぎな声が、きこえてきた。目のまえにいる少女はじつとだまっているのに、声だけがきこえてくる。

まるで、次郎じろうの心にむかつて、そのままはなしかけてくるようだった。

「きみ、亜矢子あやこさんって、いうんだね？」

「ええ」

亜矢子あやこは、うなずいた。どうやら、ふたりのあいだでは、おたがいに考えていることが、わかるらしい。

「あたし、あなたが考えていることが、ちゃんとわかる。だから、あなたが、先生にしかられたことも、タクシーにはねられそうになったことも、みんな知っているの」

亜矢子あやこにいわれて、次郎じろうは、ちよつと、てれくさくなった。学校で、先生にしかられたことまで、亜矢子あやこに知られてしまったからだ。亜矢子あやこは、これまでのことを、すっかりはなしはじめた。

三か月まえ、亜矢子あやこは、はじめて次郎じろうの考えていることが、わかるようになった。そのとき、亜矢子あやこは、気がくるったんじゃないかと思つて、ほんとうにびっくりした。どのだれともわからない、ほかの男の子のことが、なにもかも、すっかりわかる。まるで、電波でんぱでおくられてくるように、それが、亜矢子あやこの心につたわってくるのだ。

